

## 帰り道

下山 愛加

ある日の夜のことだった。その日はバイトがあつて、何人かの友人と一緒に帰っていた。

みんなで話しながら歩いていると、急に友人の一人が寒いと言い始めた。その日は八月で、とても暑い日だったため、かぜでもひいたのかと思っていた。

しかし、暑いと思っていた私まで、寒いと感じはじめたのだ。

こわくなった私たちは、早く家に帰ろうと思い、走って帰ることにした。ところが、走っても走っても家につくことができないのだ。

見なれた道に出たと思いきや、何度も何度も同じ道を延々と回っているのである。

そのうち疲れてきた私たちは、親に連絡することにした。スマホから親の連絡先を探し、電話をかけるのだが、かからない。よく見ると、そこは圏外になっていた。

「え……。どうしよう。」

「私達、家に帰れるのかな。」

「もし帰れなかったら……。私達、どうなるんだろう。」

みんなの不安がつのる。その時。

「大丈夫？」

と小さな女の子が急に現れて、声をかけてきたのである。

「ああ、お姉ちゃん達もお家に帰れなくなっちゃったんだね。でも大丈夫！帰り方を教えてあげるから！」

私達は本当にこの子を信じてもいいのだろうかと思いつつも、他に帰る手段が分からなかったのので、教えてもらうことにした。

「えつとね、目をつぶって、十秒数えたら帰れるよ！あ、でも、今日あったことは、誰にも言っちゃいけないよ！」

なぜ誰にも言ってはいけないのか聞く前に、女の子は消えていた。

その後、私達は女の子の言う通りにすると、家に帰ることができた。

この時の出来事は誰にも言わないと、私は心に決めていた。